東邦学誌
第32巻第1号
2003年6月
論　文

龍王の娘たち

坂　田　千鶴子

目　次

1　日本神話と龍
2　断たれた竜宮への道
3　ワダツミとは誰か
4　箱の中にいた龍の娘
5　人の世と仙都の別れ
6　母系の切断・父系の誕生

1　日本神話と龍

龍や海神の娘との結婚によって王国の始祖が生まれるという神話は、朝鮮の高句麗、高麗、インドシナ、シンガポール、ベトナムなどに広がっている。アジアの多くの国々では、龍である皇帝が支配する中国にならって、龍は王家の象徴である。

わが国の神話には、龍はほとんど登場しない。しかしその一方で、昔話や民話の中で竜宮はお馴染みだ。浦嶋神話の主人公が近世、浦島太郎となって以来、乙姫様は竜宮城に住んでいる。現代の浦島絵本でも、竜王がいて浦島と乙姫の結婚をとりきめたりする。竜宮童子の話も広く知られている。このアンバランスはいかにも不思議である。

しかし、古代の海の神話、ワダツミの神の宮に龍は潜んでいた。

龍が海の神話に登場する唯一の例は、『日本書紀』本文のトヨタマビメの神話である。臨月の身で風波の早い日を選んで海を越え、女はワダツミの神の宮から、山幸彦であるヒコホホデミのもとに来る。

本国の姿に返って産むから覗くなと女は言う。男は約束を破り、こっそり覗く。すると女は龍になっている。

男が怖くなって逃げだすと、一部始終を知った女は男に離別を申し渡す。そればかりか女は生まれたばかりウガヤフキアヘズを渚におき、海の道を閉じて去ってしまうのである。神代は、この衝撃的な破局を一大クライマックスとして幕を閉じる。

置き去りにされた赤子は母の妹であるタマヨリビメに育てられ、やがてこの叔母と結婚して神武天皇の親となる。神武天皇の登場で、歴代天皇の世紀が始まる。

手短に言えば、日本の初代天皇の、その四分の三は龍の血筋であると、日本の正史『日本書紀』の本文に、明記されているということである。そもそも英雄神話、創世神話にあって、捨て子が王者になるという例は、枚挙に遑がない。しかしその両親の離別は、考えるべき問題を含んでいる。

第一に、ここではそれは単に男女の別れを意味してはいない。それはワダツミと山幸彦との

関係を変える。記紀の世界の構造にあって、このことの意味は大きい。

山の神、オホヤマツミ神の娘コノハナサクヤビメと結ばれた天孫ホノニニギの息子山幸彦が、いま山の神ばかりか海の神の力をも得て王者となった。しかし、そのあとの、この海の神との別れに、より多くの意味が隠されているように私は思う。『日本書紀』神代は、旧約聖書と同じく、楽園喪失の物語なのだ。

そもそも海の王であるワダツミとは、窮地にあった山幸彦を助け、国の支配者となる力を与えた者である。その素性を見抜くや、すぐに快く娘との結婚を許した家長。山幸彦にとってワダツミはまさに負んぶに抱っこの親代わりであった。山幸彦のタブー破りは、この関係に終止符を打ったのである。

そればかりではない。この二人の立場は、この別れに重要な意味を付け加えることになる。

そもそもワダツミは国の王でもあった。山幸彦もいまや国の王者である。とすれば、これは今や国家間の外交の問題であり、海の道を閉じるという行為は、国交の断絶としての象徴的な意味合いを含んでいた。

第三に、ここには男と女のジェンダー・ポリティックスがある。

女がタブーを男に課し、男がそれを破るというパターンが記紀や『風土記』の世界には繰り返し現れる。これもその一つなのだ。

この時代の神話で、おきて破りはいつも男である。決して女ではない。なぜか。この世界にあって掟を定めるのは、常に権力の側であることを考えれば、ことはみやすい。

縄文土器に刻まれているのはすべて、男ではなく女の神々である。古代、神話が語られ、やがて記されるにいたる以前の世界にあっては、女の力、母たちの力が、男の力、父たちの力と遜色なく、それをしのいだであろう。

そもそも哺乳類は自然界にあって母系であり、人類も例外ではない。日本古代の王たちの名が従来考えられてきたより、はるかに多い女性を含むことも明らかにされてきた（中山千夏『イザナミの伝言』築地書館　1998）。

しかし、武器を持った戦いを必要とする国家形成の動きとともに、女の力がねじ伏せられていく。女の禁止条項をわざと、あるいはうっかりと破る男の姿は、こういう時代背景のなかで、新しくスリリングなものとして支持され、大量生産されたのだろう。

これについてはのちほどあらためて述べることにして、再び龍の話に戻ることにしたい。記紀にも『風土記』にも、この山幸彦を驚かせた龍のほかに、龍神や龍は一度も登場しない。『日本書紀』本文にあるこの記述が、記紀に龍が現れる唯一の例である。

『古事記』では、トヨタマビメは龍ではなく「八尋の和邇」になるのである。『日本書紀』でも第一の一書には「八尋の大熊鰐」とあり、第三の一書に「八尋の熊鰐」とある。龍は鰐に塗り替えられている。

『日本書紀』には、事代主神も八尋の熊鰐になって玉櫛姫に通ったとある。熊と鰐のイメージがここでは一つに合体している。まったく別種の動物が一つになって神聖な存在を象徴することになる。東アジアでは熊は水神であるというが、肥前風土記にも、流れに逆らって毎年世田姫のもとに通ってくるのが海の神で、これは鰐魚だという記述がある。これも合成動物なのだろう。

北京の紫禁城では皇帝の権威を、一万三千八百匹の龍の装飾が誇示する。紫禁城には遠く及ばなくとも、朝鮮半島の李朝の王宮や，琉球の首里城、ベトナムの王宮でも、龍は王権の象徴であった。しかしわが国の京都御所や皇居に龍の飾りはない。日本の皇室は龍を避けたのだ。

とはいえ、龍を鰐と言い換えても、その出身地は同じであり、隠れた尻尾が見えているようなものだ。鰐は中国の揚子江以南が生息地であり、鰐の娘も中国が出身地なのだ。

荒川紘一の指摘するように、これはわが国が中国を模倣して国作りを進めながらも、天皇の独自性と正当性を主張しようとしたからだと考えられる（『龍の起源』紀伊国屋書店　1996）。

『古事記』は、中国との関係をまったく書かないし、『日本書紀』では中国とのかかわりを述べていても、中国王朝の「天下」に組み込まれていた歴史を隠蔽している。

つまり文字面では、記紀に中国皇帝の影はない。しかしこれを象徴的なレベルで表すのがワダツミであり、もう一つの例が、丹後国風土記の浦嶋伝説に描かれた神の娘、亀姫が両親と壮麗な御殿に住む、常世であった。

フランスには水の辺の妖精メリュジーヌがいる。この話が驚くほどトヨタマビメの神話と似ていることを、篠田知和基は指摘する（『竜蛇神と機織姫』人文書院　1997）。

入浴の姿を見るなというのを夫が覗くと、メリュジーヌは蛇になっている。見られた女は男を棄てて実家に帰っていく。

ところが男に禁忌を破られて去る龍の娘は、わが国にもう一人いる。『丹後国風土記』に登場する浦島伝説の亀姫である。

『万葉集』の水江浦島子の長歌にあっては、娘は亀姫ではなく、ワダツミの神の娘と呼ばれる。ここにもトヨタマビメとの浅からぬ血縁は示されている。ここでは島子が禁忌を犯して玉手箱を開ける場面に、女は登場しない。しかし『風土記』の場合には、箱の中に娘がいたのだ。海で島子に釣られたときの元の姿、五色の亀になって。

中国では亀は龍の娘である。明代の『升庵外集』に、龍は九つの子を産み、亀は龍の第一子で贔屭と呼ばれるという。1999年、西安碑林のガイドは、亀は龍の９番目の娘だと説明していた。唐の都長安のあった地、西安では、絵本の乙姫と同じ髪形、衣装を身につけた唐代宮廷の女性たちの優雅な歌舞を、今も見ることができる（図１）。

シルクロードの入り口に並ぶ店では、可憐な乙姫が小船を漕いでいる絵のついた小箱（図

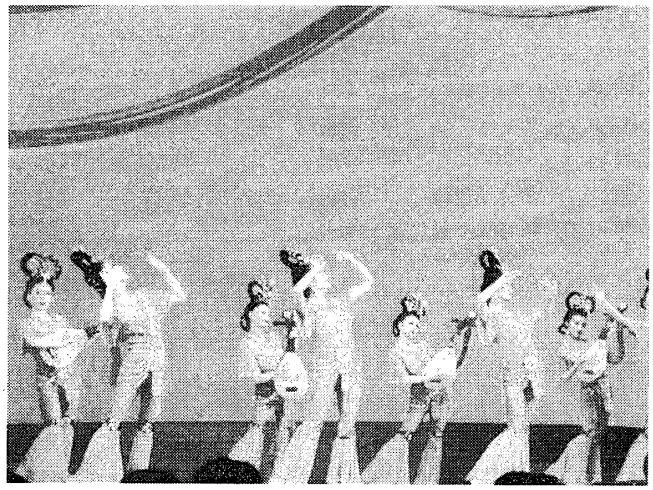

図　1

図　2

2）を売っている。同行した北京大学の女子学生は、この絵を唐代の皇女が宮中の池で遊んでいる図であると断言した。

亀姫も龍王の姫君だったのだ。日本の特権階級に受け入れられ、流布した唐代流行の神仙思想により、亀姫は仙女でもあり神の娘でもあるという、特権的な二重の身分を与えられた。彼女は玉手箱を「開けるな」という禁忌を島子に破られて去る。

2　断たれた竜宮への道

竜宮はそれほど遠くなかった。目の詰まった籠に入れられて、海に沈めば着く。鰐に乗れば、一日から八日と記紀はいう。浦島伝説では、舟に乗って目をつぶれば、一瞬の間だった。

本来、竜宮の娘たちは自由に男のもとに通うことができたのである。亀姫は風雲に乗り、また玉手箱に身を潜めて。トヨタマビメは、帰国した夫のもとに通い続けるつもりでいたと述懐している。

しかし、どちらの場合も男の掟破りによって、その道は断たれたかに見える。

「もし我を辱めざることありせば、海陸相通はしめて、永く隔絶つこと無からまし。今既に辱みつ。まさに何をもってか、親昵しき情を結ばむ」と告げ、トヨタマビメは嬰児を萱でくるんで海辺に棄て、「海の途を閉じて」帰ってしまう。ここで『日本書紀』の神代、『古事記』の上巻が終わる。強いフォルテッシモの響く終わり方である。

見るなという女のたっての願いを男は守らなかった。これを女は「辱め」であると感じた。イザナギが夜の国にイザナミを追いかけていったときに起きたトラブルと、まったく同じ型である。『日本書紀』一書第十では、私の本当の姿を見たといってイザナミは怒り、今度はあなたの本当の姿を見てやろうと言って男を恥じ入らせる。

美男とはいえ山幸彦は、まったく気楽な性分である。いやがる兄から大切な釣り針を無理やりに借り、そのあげく無くしてしまう。叱られて困れば人目もかまわず泣く。妻の前でため息を吐く。しかし、ほかならぬこの山幸彦の軽率さによって、トヨタマビメは偉大な龍としての姿を私たちの前に顕した。

無力な山幸彦は、ひとえにワダツミに渡された玉の力を借りて、兄である海幸彦を倒し、海の支配権を手にしたのだった。無くした釣針を返せと兄に責められて泣いていた山幸彦を、シホツチは籠に入れて海の中に沈める。この形状は子宮の中の胎児を連想させる。のちにわが国の皇室の祖となるウガヤフキアヘズが、胎児としてこの海の道を通ってくることの予兆でもある。また、海の国が母なる国でもあったことを暗示している。

トヨタマビメが「海の径を閉じ」たのは、この道の通行権が、ワダツミに属していたということである。

さて、『日本書紀』の一書には、この御子を渚に置くわけにいかないので、トヨタマビメが「自ら抱きて去（ゆ）く」とある。が、天孫の御子を海の中に置いてはいけないというので、妹のタマヨリビメに抱かせて送り出したと書かれている。ウガヤフキアヘズは、のちにこの叔母と結婚して神武天皇が生まれる。

3　ワダツミとは誰か

それでは山幸彦の庇護者であり、神武天皇の祖父ともなったワダツミとはだれか。彼は『古事記』ならびに『日本書紀』の一書では「我王」と呼ばれている。海の神であるばかりか、国の王でもある。ワダツミの娘が龍の化身であるのなら、ワタツミは龍王、すなわち中国の皇

帝その人ということになるだろう。

古代における高天原、黄泉国、根ノ国、常世国の描写の中で、この『日本書紀』のワダツミの宮の描写は、『丹後国風土記』の浦島伝説の壮麗な神の宮と並び、突出して「富」の力を感じさせると松村武雄は指摘する（『日本神話の研究』培風館　1958）。

『日本書紀』本文には、その宮の描写に「臺」（たかどの）が玲瓏（てりかがやいて）いたとある。この「臺」という字について古田武彦は『日本古代新史』（新泉社　1991）の中で、『三国志』ではきわめて特殊な意味に使用が限られていることを指摘して、天子の宮殿と其の中央政庁のことを意味し、天子自身のことをも指したのだと説く。

『日本書紀』一書第一に於けるワダツミの宮の描写は「其宮也城闕」と始まる。この「城闕」は城門のことであると、おしなべて注釈書はいっている。が、古田武彦は前掲書の中でこの「闕」という字についても、漢代に天子の宮殿の門を「闕」と呼び、天子自身のことをも言った用例を挙げている。つまり当時の読者たちは、この宮に住んでいる人物が天子に他ならなかったことを、理解して読んでいたということである。

次に『風土記』の描写を見てみよう。ここでは同じくその壮麗な宮に、この「闕」という字と、「臺」という字を合せた「闕臺」という字が使われている。

つまり、ワダツミの神の宮と、浦嶋神話のトコヨの国という二つのユートピアには、どちらも人々の憧れる唐王朝の都、皇帝の住む長安の王宮という具体的なイメージがあったのである。

倭国と呼ばれたわが国は、五世紀まで中国皇帝との間に君臣関係を成立させる冊封体制のもとにあった。中国の皇女と倭の皇子との政略的な結婚の例も少なくなかったに違いない。

『古事記』で山幸彦が器に吐き出した玉は朝貢、ワダツミから渡された霊力を持った二つの玉は、金印に相当する働きをしている。

一方、島子がトコヨに出発したと書かれる雄略紀には、倭国が冊封から離れる動きが指摘されている。

生まれたばかりで海辺に棄てられ、母の国に通う道さえ閉じられた嬰児。この赤ん坊こそほかでもなく、中国の胎内に永く育まれてきたわが国が、新しく律令国家として生まれ出ようとする姿であった。当時の読者はこの物語を、中国の皇女とわが国の皇子との愛の物語として読んだのである。

4　箱の中にいた龍の娘

「芳蘭しき体　風雲に率ひて蒼天に翺飛けりき」『丹後国風土記』では、島子がぼんやりして玉手箱を開けると、亀姫は風雲に包まれ、蒼空に消え去る。

このとき娘が蒼空に飛び去ったという読みは、久松潜一を始めとして幾度か提出されてきたが、いまだに注釈書の大半は、島子がお爺さんになったという『万葉集』の結末に引きずられている。

しかし『万葉集』の高橋虫麿呂の長歌は徹頭徹尾、『丹後国風土記』のパロディーであった。浦島伝説はいつの世にも、つねに新しくよみがえり、時代を映した作品を産出する不思議な力を持っている。平安時代には、洗練されたポルノ文学に変質した。明治時代に国定教科書に採用されて以来、乙姫の恋は消し去られたままである。

万葉の長歌は中でもっとも古く、良く知られた作品である。『丹後国風土記』では魚は一匹も釣れなかったのに、『万葉集』では七日も豊漁が続いて海の境を越え、たまたま出会ったワ

ダツミの娘と結ばれる。

故郷が懐かしくなれば気楽に「帰ってくるね」といい、故郷の変貌をみれば娘との約束などすっかり忘れ、元通りになるだろうかと玉手箱を開け、お爺さんになって死んでしまう。主人公は戯画化され、「世の中の愚か人」として描かれ、罵倒されるのだ。

『丹後国風土記』の浦島伝説は、日本の恋愛文学の最高峰、精神的でピュアな愛の物語だった。しかし近代以降、国境を越えた娘の恋は、日本の父権的、国家主義的な体質に馴染まなくなる。とりわけ亀姫は、女の身でありながら求愛をした咎で、評判が悪い。研究者たちからも、猥褻である、日本的ではないなどと、こぞって攻撃され続けてきた。そのため亀姫の存在を知る日本人はいまだに多くはない。

清純な美しい神の娘が、ひたむきな愛を告白した相手である島子は、心の深い男だった。その結婚も、帰郷も、玉手箱への対応も、すべて類ない人柄を感じさせるものだ。

彼が玉手箱に触れたのは、それが娘の唯一の形見だったからである。300年たって、すっかり様子の変わった故郷に帰った彼は、放心状態で訪ね回るが、父にも母にも会えずに10日も過ぎてしまう。島子は娘に会いたくてたまらなくなって、玉手箱を撫でているうち、うっかり娘との約束を忘れて蓋を開けてしまい、瞬時に娘は飛び去る。非難のできないなりゆきである。300年たっていても、この島子は年も取らないし、死ぬこともない。

玉手箱から現れる風雲は、亀姫が登場する時に使った交通手段であり、箱から飛び出たのは、「芳蘭しき体」の持ち主である。作中、この芳しいという形容詞は、もう一箇所トコヨの国から聞こえる彼女の声の形容に使われているのである。

5　人の世と仙都の別れ

島子が亀姫の求婚を受けてトコヨの国に行き、姫の両親に挨拶したとき、両親は丁重に彼を迎え、「人の世と仙都の別を称説し、人と神と偶然会える喜びを」語る。

この短い記述が、浦島神話の隠されたもう一つの主題を語るものだ。以前に一つであった人の世と神の世。別れたとはいえ、まだ完全には隔絶されていないことが、ここで確認されている。この箇所はトコヨとの距離を確認する結末と、正確に対応している。浦島伝説も日本誕生にまつわる物語なのだ。

注釈書は「別」を「別れ」と読まず、「わかち」「わき」などと読んで、「人の世」と神の世」との「区別を説いた」とか、「差別を説明し」たと訳している。これは字面の読みである。結婚を目前に控え、娘の両親が結婚相手に向かって、住む世界の違いを強調するのは、その結婚が望ましくないときである。これでは、この後に続く喜びの表現へと、なだらかにつながっていかない。

この場合は明らかに、祝福された結婚である。神の国では島子を迎えるのに、少しも躊躇いがない。出自の違いを強調したとは考えられない。それではこの「別」とはなにか。

逸文である『丹後国風土記』には、この浦島伝説の他に、奈具社の天女伝説と天橋立の伝承の二つが残されている。往還可能であった二つの世界（人の世と神の世）が、完全に断たれた経緯をそれぞれ語る。奈具社の天女は天に帰ろうとするが、長く人間世界にいたので、帰り道を忘れてしまう。天橋立の天に通う橋は、イザナギが寝ている間に倒れてしまうのだ。いずれも楽園喪失の物語である。天に通う道を断たれたばかりという、深い衝撃と嘆きが共通しているのは、偶然ではないだろう。

丹後半島は中国大陸との交流の表玄関にあっ

た。語られた時代の中国と日本の関係の変化が、『丹後国風土記』の伝説の背景にある。

亀姫の両親が説いた「別」とは、二つの世界が体験したあの歴史的大事件のことであった。龍の血を受けた子の誕生にあたっての父親の戒律破り。ワダツミの娘である妻からの離別宣言による二つの世界の断絶である。

海辺に取り残された山幸彦とウガヤフキアヘズの父子にとって、これはまさしく楽園の喪失であった。とはいえ、竜宮との行き来が、これ以後すっかり途絶えたと読む必要はない。赤子は母の妹タマヨリビメに養育され、このワダツミの妹娘とウガヤフキアヘズの婚姻があらためて行われるからである。ここに、この二つの世界の変わらぬ親密さは、証明されている。

『古事記』や『日本書紀』の一書では、タマヨリビメに託してトヨタマビメが山幸彦と愛の歌をやりとりするとある。書紀の一書は、ヒコホホデミが乳母をはじめ赤ん坊の世話係りの女を置いたと述べ、乳母を置いて子に乳をやったのが、乳母という仕事ができた始めだとある。母であるトヨタマビメは子どもを憐れに思って帰って育てたいと思う。しかし、ワダツミの側では「義（ことわり）において」よくないというので、タマヨリビメを遣わして、子を養育させたとある。姉が閉じた海の道をふたたび開き、夫を思う姉の歌を携え、妹はウガヤフキアヘズのもとに行ったのである。

亀姫と島子との出会いは、はるか時代が下って雄略天皇22年秋７月と『日本書紀』にある。

舟に乗って釣りをし、「遂に大亀を得たり。たちまちに女になる。」とあり、ここでも娘は亀である。前述したように、この雄略の時代には、中国に従属する関係から日本が抜け出していく動きが認められると、指摘される。

だからこそ、娘の両親はめったにない出会いを喜んだのである。「称説」の称は、讃える、褒めるという意味である。神の世に属していた人の世が、今では分かれて独立し、自立したことを、神が祝福したと読むことができる。楽園喪失は囲われた園、楽園からの脱出でもあった。

6　母系の切断・父系の誕生

女が玉手箱の中から飛び去っていく結末には、新たに300年という時間差が加わった。島子の再度の訪問の道は断たれる。

日本における神話の時代は、伸びやかな女の時代であった。中国を模した律令国家の成立とともに、男の時代がはじまる。トヨタマビメの子捨て、母に代わる養育者の登場は、母系制から父系制への移行の目印であるだろう。浦島伝説の場合も、『丹後国風土記』には娘の両親が揃っていたが、『万葉集』にワダツミが登場してのち、娘の母の姿は完全に消されてしまう。

女の禁止を無視した男の破戒によって、女は退場する。トヨタマビメの親権は否定され、養育権も、「義」によって却下される。この「義」を象徴し、妹娘を代わりに派遣したのが、理想的な家父長として描かれるワダツミであることも明らかである。

『丹後国風土記』の結末を私は、島子が二度と娘に会えなくなったと読んできた（『よみがえる浦島伝説』新曜社2001）。が、原文には「還知復難会」とある。島子は大仰な悲しみ方をしているけれど、実際のところ、島子は再び亀姫に会うのが難しくなったのを知ったと書かれているだけである。女は去り、男の通う道は閉ざされた。

ここでも男の破戒によって、女は実家に帰ったが、女の側には雲や風という交通手段がある。海を越えて二人は互いの声さえ、ありありと聞き取っているのである。

けじめはつけられたが、その後も龍の娘たち

はしなやかに時空を越え、伸びやかに恋人たちと愛を確認している。娘たちは風雲に乗り、あるいは大亀に乗って再会を果たしたのではなかったろうか。

海の神話に描かれたのは、恋人たちの別れではなかった。語られるのは母の国からの独立であり、母と子の別れである。それはまた母系の切断、父系の誕生の瞬間でもあった。

この稿は、2002年9月、日仏の神話学研究者組織、GRMCによって和光大学で開かれた比較神話学シンポジウム「竜宮・蓬莱・アヴァロン島」での発表原稿に、加筆したものである。